

紹介と批評

重層的構造について

——有末賢『現代大都市の重層的構造』

を読む——

1

過剰と軽薄とが同居する出版物の氾濫の中で、一冊の重厚な、存在感のある本が上梓された。有末賢著『現代大都市の重層的構造』である。全体でⅢ部10章からなる本書は、著者の長年にわたる理論と実証の成果を満載しており、読後感の充実した手応えは本書ならではのことである。いうまでもなく、本書は都市社会学を意識して書かれている。しかし、都市社会学の支配的動向に常に懐疑的に接してきた評者からすれば、本書は都市社会学におさまらない内容を豊かに湛えている点に最大の特徴があるといえる。さしあたり、本書を走り抜けに概観してみよう。

まず第1部であるが、第1章で本書全体のキーノートとなす時間的重層性、空間的重層性、人間的重層性の概念が提示されるとともに、それらが都市における伝統性や歴史性、エコロジカルな構造や階級・階層構成と共振し、ひいては意味の重層性にみちびかれる理論地平があきらかにされる。そして、年齢、ジェンダー、ジェネレーション、エスニシティなどを切片として開示される意味の重層性に、著者の熱いまなざしがそがれるのである。次に第2章では、地域社会研究の研究史的サーベイにもとづいて、地域社会研究をつらぬく四つの領域（民俗文化、地方制度、地域行政、地域文化）からの分析視角があきらかにされるが、ここでとくに地域文化論にたいする都市社会学の意義と課題について考察がなされ、地域社会研究に生活・文化論的視点を導入する意味が強調される。そこにはまぎれもなく、都市的生活世界のリアリティを生活文化論の地平で浮き彫りにしようとする著者のスタンスが色濃く影を落としている。第3章では、国際化、情報化とパラレルに進展した「世界都市化」のインパクトが、評者の言葉を使えば「都市社会学の空間論的転回」を強力に誘っていることが指摘される。それは具体的には、シカゴ学派に特有の「自然としての空間」、「文化としての空間」から「新しい都市社会

学」(new urban sociology)に見られる「関係としての空間」、「媒介としての空間」への概念的シフトを介して確認される。そして、こうした空間の多義性への着目が現代大都市の重層的構造の解明の糸口となることが強調される。

「先進資本主義国の大都市構造」というタイトルを冠した第II部では、まず第4章において、エスニシティ、階級、ジェンダーに座を据えて変貌するイギリス社会への接近がここらみられ、それとの相即関係においてロンドンの都市構造、とりわけ空間的分離の諸相が浮き彫りにされる。そこで描出される都市構造の貌はきわめて多面的で錯綜した様相を呈しているが、第5章では、都心居住に焦点化してその多面性、複雑性の解説がなされる。著者によれば、都市化過程に遡及して確認される都心居住のパターンは、クラスター、同心円的分布、社会的地位の布置構成という形態をとる、という。ところで、こうした三つのパターンを貫く都心居住の問題構制は、海のこちら側で取り沙汰されてきたいわゆる東京プロブレムズの諸相をも通底するというのが、著者の主張である。第6章では、こうした問題意識に沿って、中央区佃・月島地区、港区台場地区、新宿区西戸山地域などの事例分析を介して、都心居住の実態が詳述される。著者はここで、ロンドンとの比較で浮かび上が

る類似性よりもむしろ違いに、すなわち住宅階層、ライフスタイルの差異に周到な目配りをし、「東京化」のプロセスが「経済」に偏した空間的分離(↓社会的分離)であったことが指摘される。著者が選んだ事例のもつ個性は否定できないにしても、エンゲルスが最初に指摘して以降、折にふれて言及されてきた、エスニシティ、ジェンダー、そして階級の問題を深く内在させてきた「近代」ロンドンの「下方爆発」(『イギリスにおける労働者階級の状態』)が、「現代」東京においてなぜジェントリフィケーションとしてしか現象しなかったのが、ここでは暗黙裡に説きあかされている。

さて第III部では、一転して都市民俗文化に目が向けられる。そのためにまず第7章で「都市民俗学」への疑義を提示することを通して、著者自身の都市文化の変動への基本的立場の推敲がなされる。著者によれば、「都市民俗学」においてあいまいにされてきた、伝承母胎と社会変動のトレーガー、都市的生活様式、都市の社会関係とエスニシティなどにかかわる諸問題にどう接近するかが、都市民俗研究の要になる、という。第8章では、こうした問題視角から佃・月島の祭祀組織のいっそう微に入った分析がおこなわれる。そこでは佃島の祭りを祭祀の内部構造、月島の祭

りを外部構造とした上で、それじたい、地域社会構造の一つの反映としてある内部構造と外部構造の関係を、地縁性とその変化に即してトレースしている。次いで第9章では、第8章の問題意識の延長線上で、佃・月島地区の地域集団（祭祀組織）と歴史的生活環境に基づいてインナーシティ問題が観望される。著者はここでインナーシティ問題のプロトタイプを見い出すとともに、大都市が再生され、再活性化され、しかも結果としてマイクロ分析が彫琢される社会的実験室といったようなものを想到しているように見える。ところで最後の第10章では、前章、前々章の展開を受けて大都市構造の変動のなかでの「伝統と変化」の意味が検討される。著者はその際、ウォーターフロント開発を高度都市化、アメニティ空間、親水空間の戦略的要と位置づけた上で、佃祭りの変遷から浮き彫りにされる「伝統と変化」に立ち返ってウォーターフロント開発の可能性をさぐり出そうとするのである。そして著者は、こうすることによって大都市の重層的構造の解明に向けての貴重な一里塚が形成されると主張している。

2

こうみていくと、あらためて本書は著者有末氏の積年に

およぶ問題意識が見事に結晶したものであることに気づく。本書はみてきたところから明らかなように、第I部の精緻な理論的展開をベースにして、第II、III部でその周到な応用がはかられるといった全体の構成になっている。この全体の構成のわかりやすさに加えて、本書の特徴をなしているのは、都市民俗研究の新しい地平をきりひらきたいとする著者の意欲が随所に見えかくれている点である。著者はこの都市民俗研究（↓都市社会学）のフロンティアを、大都市の重層的構造の剔抉を介して浮き彫りにしようとする。そして方法（論）的には理論と実証、マイクロ分析とマイクロ分析をきり結ぶことによってあきらかにしようとしている。くだくだ述べるまでもなく、本書を貫く著者の問題意識はきわめて明晰である。全体の見取り図のなかでの個々の論文の配置もそれなりの整合性をもっており、ややもすれば論文集になりがちであった、この種の先行作品群が陥っていた弊からも免れている（そもそも本書が既発表論文の集大成であることを考えればこそ、上述の整合性には著者の並々ならぬ努力の跡がうかがえる）。加えて、第III部におけるモノグラフからはそれなりに個別事例のもつ重みが伝わってきて、都市民俗世界の深さと拡がりといったものにたいして、あらためて想像力がかきたてられる。

いずれにせよ本書は、評者にとってそこから様々な可能性が拡がっていく、刺戟に富む作品であるといつていい。

しかし正確にいうと、評者が手応えを感じると先に記したのはこうした文脈においてではない。むしろ本書がもつポレミックな性格から派生するものである。本書はまぎれもなく、これまで支配的と信じられてきた都市社会学にたいして一定の緊張関係を維持している。そしてそのかきりで「新しい都市社会学」の理論動向にもそれなりに目配りをしている。しかし著者が支配的な都市社会学に対峙するのは、基本的には都市文化論、換言すると刷新された都市民俗研究の理論地平においてである。(あるいはこう言うと、いま述べたことと矛盾するかもしれないが、そもそも本書には、都市社会学への批判的視座の上に都市文化論を練り上げようとする側面と、都市文化論の推敲を介して都市社会学論(著者のいう「新しい」都市社会学)を展開しようとする側面とが混在している。)評者によれば、「新しい都市社会学」と都市文化論とはいわれるほどに対立するものではない。とくに最近のように、「新しい都市社会学」が空間論的な彫琢を経て「場所性」をキャッチアップするなかで、たとえばコモンスの領域に分け入ってくるようになる⁽¹⁾と、都市文化論との分水嶺をもとめることじたい、そ

の根拠が鋭く問われることになる。とはいえ、「新しい都市社会学」から支配的な都市社会学を見据える場合と、都市文化論から支配的な都市社会学を見据える場合との間にある種の「落差」が存在するのも事実である。

以下、評者はこの落差を意識して、もつぱら「新しい都市社会学」↓空間論の展開にこだわる立場から、著者がいう重層的構造の概念に検討を加えてみたいと思う。いうまでもなく、この重層的構造の概念にこそ、著者の方法(論)的立場のみならず都市社会学観が凝縮されているのである。

(1) 評者によれば、この段階ですでに「新しい都市社会学」は著者のいう「新しい」都市社会学の理論的世界に分け入っていると考えられる。なお、「新しい都市社会学」の空間論的転回の動向については、拙稿「都市研究の新しい地平―都市の意味論的展開のために―」『東北都市学会研究年報』Vol.1 一九九九年、および拙稿「都市社会学の新しい課題―新たな空間認識をもとめて―」藤田・吉原編『都市社会学』有斐閣、一九九九年、を参照されたい。

3

著者によれば、「重層的構造」とは、変動の要因が重なっ

て作用し、異なったレベルの社会構造が同一空間に同時に現出することを意味している。つまり、複数のレベルを分けることによって、時間的、空間的、階層的、民族的、ジェンダーなどのそれぞれの構造が大都市の中に重なって出現しているということである。」(一頁)とここで、著者がこうした重層的構造の定式化の向うに想到するのは、アルチュセールの以下のような重層的決定の概念(今村仁司氏からの引用)である。

「それぞれ固有の特質をもつ矛盾が、にもかかわらず、特定の状況で、特定の場所において、集積し凝縮すること、それが矛盾の重層的決定である。本質が現象を決定するのではなく、諸矛盾が異質のままで相互に決定しあい、同時にそれらの水平的相互決定は垂直的に『最終審級(下部構造)』の矛盾によって決定される、つまり各部分領域の活動範囲が限定されつつ、つなぎ合わされる。この場合、諸矛盾が『相互に決定しあう』というのは、一方と他方が互いに働きかけて『限定し』あい、特定の文脈のなかでの相互の位置を定義することを意味する。またこの並存する諸矛盾の相互作用を、もうひとつ別のレベルから、つまり社会構造の下から垂直方向で働きかける作用がある。それがマルクスの考えでは、構造を秩序づける決定因となる下部構造である。下部構造の下から上への垂直作用を『最終審級における決定』と呼ぶ。重

層的な決定作用は、このような水平と垂直の二つの側面把握される。単に、矛盾の相互決定があるにすぎないのなら、それは単なる多元論ではない。マルクスにあって重要なことは、諸矛盾が相互越境しあうだけでなく(すでにこれだけでも並存的な多元論ではない)そうした相互越境的決定を可能ならしめる垂直的な『最終審級における決定』を支持することである。なぜなら、この垂直的な決定の作用こそが、社会構造の構造としてのまとまりを作りだすからだ。」(二―三頁)

だが著者は、この重層的決定の概念を大都市の都市社会構造(重層的構造)に援用するにあたって「最終審級における決定」論の立場をしりぞける。というのも、「ポスト・モダンと呼ばれる現代の社会構造においては、『自己決定』の原理が言わば『認識論的切斷』の役目を果たしている」(三頁)からである。にもかかわらず、著者が「理論的にも実証的にもアルチュセールの言う『重層的決定』から出発」するのは、『現代』という時代が、『近代』の上に重層的な構造を展開している」(一―三頁)と考えるからである。著者によれば、結局のところ、アルチュセールの重層的決定の概念を祖型とする重層的構造の概念は、「社会変動論による構造と行為との理論的統合」(三頁)に

向かうべきものとして措定されるのである。こうした論議は、後述するようにそこに重大な理論的齟齬をはらんでいる。しかしここでは、著者のいう重層的構造に関する論述をもう少しみておこう。

著者は、重層的構造論を展開するにあたって、都市を「そこでさまざまなことが展開される、一つの場所」アーナ（二七頁）として措定した上で、それになりたい意味論的アプローチの重要性を強調する。それはエコロジカルなアプローチにも「下部構造」論的なアプローチにも偏するものではなく、「都市の社会構造を、歴史性（時間性）、空間性、ジェンダーやエスニシティなどの意味論的差異性などに関連づけて問い直していこうとする」（一七頁）ものである。そして著者によれば、この「意味論的差異性」Ⅱ「意味の重層性」は、時間的・空間的・重層性、人間的・重層性の三つのアングルからせまることができるといふ。まず時間的・重層性では、時間意識が「歴史としての時間」Ⅱ「客観的な時間」と「生きられる時間」Ⅱ「主観的な時間」とに二分され、前者における都市形成史や文化的伝統、後者における個人のライフヒストリー、さらに両者の中間に位置する「生活構造」や生活状態史が考察の視野におさめられる。次に空間的・重層性では、「地形

に基づいた伝統的な空間分割に加えて、近代的都市形成の過程において生じてきている、交通機関による地域構成、商業地域、業務空間などの都市機能による地域構成、住民の階級・階層構成による空間的分離など」（二四頁）が「意味の観点から問い直す」（二七頁）やり方で検討される。第三に人間的・重層性では、「時間的・空間的観点を『生きられた都市』という現象学的な生活世界のリアリティの中に投げ込んで、そこから都市的生活のリアリティを抽出し」、「年齢や世代の投影としてライフヒストリー、性別やジェンダー問題を通しての意味の重層性、さらに人種・エスニシティの重要性を通しての都市社会の解明」（三八頁）がこころみられる。

以上、著者のいう重層的構造の定式化の試みをきわめてラフに概観してみたが、そこから確実にいえることは、事実上、ミクロな視点から重層的構造が「意味の重層性」に還帰されていることである。そしてこの立場に即して、「ミクロな小地域社会のモノグラフを通して、この重層的構造を実証的に研究」（二六六頁）したのが第Ⅱ部であり、第Ⅲ部（とりわけ後者）である。ところで、こうした重層的構造の「意味の重層性」への限定は、ある意味で本書を成功に導いている。しかし、そこから「重層的構造の『構

造要因』にかかわる理論的諸問題」(同頁)に立ちかえろうとすると、著者が一方で「最終審級における決定」論をしりぞけながら、他方で「構造と行為との理論的統合」に向かおうとする矛盾が、一挙に火を吹き出すのである。最後に、この点に関して評者の見解を少し述べておこう。

4

著者が重層的構造の概念を練り上げる際に、「最終審級における決定」論をしりぞけ、「自己決定」の原理を持ち出したことは首肯できる。しかし私見によれば、それが『認識論的切斷』の役目を果たし、著者のいう「意味の重層性」へときりむすばれるには、実は「構造と行為との理論的統合」に向かうのではなく、むしろそれが脱構築されねばならないのである。このことはアルチュセールの新しい読みともかわってくるが、レギュラシオン・パラダイム、オートポイエティズムを経て次第に明晰にされた、個人、組織、制度、システムが互いに自律性を有しながら相互依存のために調整しつつ構造的に結びついている状態は、もともとアルチュセールの「重層的決定」論の視圈内にあるといえる。ただこう言い切るためには、デカルト主義的な「主体と客体」の二元論の下で優位を占めてきた認

識論にたいして存在論の復位をはかる必要がある。そしてこの文脈で、主体(Ⅱ行為)を客体(Ⅰ構造)から抽象的に切り離すいわゆる「構造と主体」の枠組みを相対化していくことがもとめられる。評者は現在、その方途を「世界・内・存在」の概念に基礎するハイデガーの「解釈学的方法」とマルクスの「実践的唯物論」とを通底するものから攻め上げたいと考えているが、ここではこれ以上述べる余裕はない

重要なことは、存在論的な議論をベースに据えて重層的構造の概念を彫琢していく場合に、以下のような視点、すなわち「一つは構造そのものの解明よりも構造の生成過程に焦点を据える発生的な視点であり、いま一つはそうした「構造化する構造」への視点の移動とともに立ちあらわれている、異なった構造とか関係の多次元的で可変的な接合(articulation)に力点を置き、いかなればハビトゥス、すなわち『社会的なものを個人の行動において体現する、内面化された規範や社会的手続きの総体』(リピエツ)に関心を抱く視点」(拙稿「都市研究の新しい地平」、二二頁)が基本になるという点である。「意味の重層性」を基軸に据える著者の重層的構造の概念が上述の視点の極北にあるとは到底考えられないが、いわば異なった構造を連結

させるメタ構造、つまり「諸構造の構造」を想定する構造主義的枠組みから著者がどの程度距離を置いているかは、なお定かではない。

以上のことと関連して著者の重層的構造の概念で気になるのは、「現代」と「近代」との重層的な構造という捉え方である。残念ながら、著者はこの点について立ち入った議論をおこなっていない。しかし、ポストモダンへの一定の論究をおこなってきた著者であればこそ、この点を明確にする責任がある。著者のいう時間的重層性を踏まえるなら、「現代」と「近代」というターミノロジーはやや不用意であると思われる（評者がもし時間的重層性というタームを用いるなら、それはブローデルのいう「長期持続」の概念に近いものになるであろう）。いったい、著者は「近代」のもつ両義性¹¹パラドクスをどう見ているのだろうか。評者によれば、「現代」への理解は、このパラドクスにたいするフレキシブルなアプローチを抜きにしてはあり得ないと思うが、どうであろうか。いずれにせよ、この点は著者の重層的構造の概念にとって、そして都市文化論¹²「新しい」都市社会学の展開にとって避けて通れない問題であると思う。

以上、重層的構造の概念に絞って、評者の勝手きままな意見を述べた。もとより本書には、冒頭でも述べたように、長年にわたって有末氏が培ってきた理論的センスとモノグラフの作成手法が活きづいており、評者としては充実した手ごたえを娛しむことができた。また本書を通底するテーマは、歴史認識の深さと現実感覚の豊かさをもとめるものであり、それだけに、このテーマに果敢に挑戦し、それに一定の答を与えている著者の社会科学者としての力量にあらためて脱帽する次第である。すでにモノグラフィ¹³として定評のある著者が、本書によって、あらたな声価をかちえるであろうことは間違いないと思われる。最後に、今後とも同じ都市研究者として、そして何よりも都市の重層的構造に関心を抱く者として、いつそうの知的刺激が与えられることを願って、この拙いコメントを終えることにしたい。

（ミネルヴァ書房、一九九九年刊）

吉原 直樹